
o n e h e a r t ~片思いから~

ゆきほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

o n e h e a r t 片思いから

【Nコード】

N 2 4 0 2 B

【作者名】

ゆきほ

【あらすじ】

バイト先で知り合った彼との・・・

私は彼との事を小説に書こうと思います

「おはようございます」

と聞き覚えのない声がしてふと見たらあなたがいました。 出会いは八月中旬バイト先

彼は他の店舗の人で私の店にヘルプに来たらしい。
なんの会話もなくその時は過ぎた。
特になんの感情も抱かなかった。

夏の終わり また彼と一緒にバイトに入った時この前が嘘のように
なぜだか話が盛り上がった。人見知りの私に彼は優しく話し掛けて
くれ、優しく微笑んでくれた。

「高校生？」

「どここの学校？」

「いつからこのバイトやってんの？」

勿論私だけにそうしてくれるのではない、優しい人なんです。
誰にでも・・・

気がついたら、彼が他の人と仲良く話しているのを見て嫉妬している自分がいた。

シフトが重なっている日は嬉しくて嬉しくてたまらなかった。彼には心が開けて色んな話をした。声が聞けるだけで幸せだった見るだけで幸せだった

こんな気持ちになったのは初めてでいてもたってもいられなくなるほどだった。

働いてる店舗も違うし彼は大学生で私は高校生 なんの共通点もない、ただ唯一いえるのは彼の通っている大学が私の住んでいる駅にあるということ。それだけ。偶然会うことをどんなに期待していたか・・・

9月になって入れ代わりは何度かあったけど彼と一緒に仕事が出たのは1回だけ。

その日は夜番だった。

閉店作業がまだ完璧でなかった私は色々ミスをして泣きそうになった。

恥ずかしかった。よく分からないけど彼に見られなくなかった。

でも、彼は嫌な顔ひとつせず丁寧に優しく教えてくれた。

「俺も最初はできなかったんだよね」長い時間2人だけでバイトをしていて本当に楽しかったし

この時“好き”と確信した

閉店時間になってほしくなかった。

このまま時間が止まればいいのに。

バイトが終わりわかれてから何度も何度も振り返っていた。

それからというものの彼が気になって気になって仕方なかった。

10月になって彼に彼女がいる事をバイト先の先輩に聞いて知った。
た。

ショックだった。

よくよく考えたら顔もかつこよくて頭も良くて背も高くて優しい彼

に彼女がいけないわけがない。

私は彼が好き

でも彼はそんなことは知らない。

友達とも思っていないと思う。

むしろ他人

そうだよ。会うのも話すのもバイトの時だけ。

気持ちを伝えるべき？

でも彼女がいると知った今気持ちを伝えようとは思えなかった。

私は彼女みたいに可愛くないしたかが高校生、

彼の気持ちを自分にむける自信がなかった。

しばらく彼と会うこともなく私は新しい恋を見つけようと決めた。

彼のことは忘れようって。彼女がいるんだもん。

諦めるしかない。

私は彼に相応しくない。明らか迷惑

私に彼氏ができた。同じクラスで彼に会う前に少し気になってた程度の人。

彼のこと忘れるのにちょうどいいって思って付き合いだした。

すぐに忘れられるだろうって思ってた。

付き合って1カ月がすぎた頃、彼の大学の文化祭で私は友達とフリーマーケットをだした。

久しぶりに彼に会った。

「久しぶり」

と、彼は手をふった。

こっちを見て優しく微笑んだ。

こんな些細なことでも嬉しかった

彼はフリーマーケットに来てくれた。 やっぱり彼が好き
見る度にどんどん好きになってく。
どんどんひかれてく。

ピアスを買ってくれた、彼女につて。
あなたにつけてほしかった・・・

本当は泣きたいくらい悲しかったけど、笑つてごまかした。
「ありがとうございます」
つて。

彼にとって二番目でもいい。
そばにいたい。

その日から4日後久しぶりに彼とバイトが重なった。
アドレスを聞こうとやっと決心した。
教えてくれないかもしれない。

優しい人だから彼女一途なんだと思うから。
他の女とはメールしないかもしれない。

不安

アドレスを聞いて断られて気まづくなるのは嫌だった。
惨めになるのは嫌だった。 でも彼と連絡をとれば今より近づける
と思うと、
どうしても聞きたかった。

彼の携帯がロッカーの上においてあった。
メールが来たみたいで画面がついた。
彼の待ち受けは

彼女とのチュープリでした
見たくなかった。
見なければよかった。
これでまた彼にアドレスを聞けなくなった
頭が真っ白になった。

分かっていただけなぜかショックで、
彼と話せなかった。

話したくなかった。せっかく話せるチャンスだったのに・・・
どうすることもできなかった。
ますます聞きづらくなった。
でも諦めきれない

彼氏と付き合って2カ月になった。
色んなところに行った。

でもどこえ行くにも思い出すのはあの彼だった・・・

別れよう

嫌いな訳じゃない。少しでも好きっていう気持ちがあったから、
付き合ったし優しい人だと思う。

こんな私を好きだと言ってくれて嬉しかった。私に尽くしてくれて
本当にありがとう。

私もあなたに精一杯尽くそうと思った。

あなただけを見ようと。

でも無理でした、

ごめんなさい・・・

私はやっぱり彼が好きなんです。

忘れられないんです。

諦めきれない。

こんな気持ちのまま付き合う訳にはいかない。

ズルイよね。

本当にごめんね。

でもこの2カ月ホントに楽しかった。

こうして彼氏と別れた。全然会ってなくても連絡とってなくても
こんなに好きでいられる。

彼しか見れない。

迷惑だって分かってる。

だけど

気持ちを伝えたい

彼がバイトを辞めるって話を耳にした。

いつ辞めるかは分からない。

本当かどうかは分からない。

焦った、

辞める前に連絡先を聞きたい。

いつものようにバイト先でシフトを確認してたら・・・

彼の名前が書いてある。

“まだ辞めてないんだあ” ってすごい安心した。 5日後の水曜日

だった 彼に会いに店に行った。

彼はいた。

勇気を出してアドレスを聞いたら、意外にも彼は

「いいよ」

と愛想よく言って紙に書いてくれた。

嬉しくて仕方なかった。 いてもたってもいられない。

しばらく話した

彼は年が明けたら辞めるらしい。

大学のキャンパスが変わるから引越すんだって。 都心にね。

もう会えなくなると思っていると涙かでるぐらい寂しくなった。 辞めてほしくない。

会えなくなるのは絶対嫌。

次の日さっそく彼にメールを送った。 返事は悲しいぐらいあつけない。 一言だけ・・・どんなに長い文を送っても返ってくるのは一行。

それでも嬉しかった。

2日に1回のペースでメールした。

電話もかけたけど電話は出てくれなかった。

彼に会いたい

学校の帰り彼のバイト先に寄ってみたり大学の中を歩いて帰ったりしたけど

神様は意地悪だね。

彼に合わせてはくれなかった。

3週間がたち彼が彼女と手をつないで歩いてるのを見た。

幸せそうな彼・・・

私が彼女だったらどんなにいいか。

彼女が羨ましい声をかけられなかった。

あんなに楽しそうな彼を見たことなかった。

私はただ見てるだけ？

なにも変わらない

このままだと彼は辞めて一生会えなくなる

このままで終わりたいくない

次の日の夜、店をのぞいたら彼がいたので終わるまで待つてることにした。

寒かった。

12月の寒い中1人で階段に座って彼をひたすら待つていた。

凍えそうなぐらい寒かった。

11時半バイトを終えた彼が私の前を通った。 私は彼の名前を叫

んだ 彼はビツクリして振り返る。

いったん場所を移動して、彼の家につれてってくれた。彼の香りが漂っていた。

「飲みな」

温かいミルクを差し出す彼。

震えながら

「ありがとうございます」

私は涙が出てきた。

こんな事して馬鹿みたい

「一体どうしたの？」

彼が聞く。

気持ちを伝えた

泣きながら必死に

彼は黙っていた。困っていた。

私はその場にいられなくなり

「12月24日大学の噴水前で待ってます」と一言言っ出ていった。

彼のアドレスを消した

番号も消した

気持ちを伝えられた。

よかった。

可能性はないと思うけど24日ずっと待ってみよう。

ここまでが私の書いた小説です。

これを彼に送った。59分

「ごめん」

きた

彼は走って

息をきらして

こっちに向かってる

嬉しかった。断りにきたのに嬉しかった。

会えてよかった。

「ありがとう」

って言って帰ろうとした時 告白された

夢？ 12月24日、彼に伝えた例の場所に私はいた。

来るはずもない彼をずっと待っていた。

あんな小説を彼に送ってどうなるのか・・・

自分でも自分がした事がよく分からない。

ただ記録として、

残しとけばよかったものを・・・

ずっと座っていた。

辺りは暗くなってきた。カップル達が私の前を横切る。惨めだ。

11時46分・・・そろそろ帰ろうか。

いや、後少しだから待とう。

11時59分・・・帰ろう。立ち上がった瞬間後ろから足音が・・・

「えっ、どうして」

彼は息をきらしながら私に向かって走ってきた。

「す、好きだ。好きなんだ」

真っ赤な顔をして彼は言う。

戸惑った。

涙が止まらなかった。

これほど嬉しくてないた事はない。

12月24日 忘れられない日

12月24日 最高の日

彼と付き合ったものの実感がわかなかった。
幸せすぎて恐かった。

この幸せがいつか壊れるんじゃないかって。
彼とは色んな所に行った。毎日一緒にいた。
会わない日は1日もなかった。

デイズニールランドに水族館、遊園地、映画、スケート・・・彼とな
らどこへ行っても楽しい。

彼と一緒にならなにをしても楽しい。

年末も彼の家と一緒に過ごした。

2人でカウントダウン

3、2、1・・・

除夜の鐘は家の中にも聞こえた。

あけましておめでとう 今年もずっと一緒にいられますように。

「海が見たいの」

私は言った。

付き合ってから1カ月たった頃彼の車で海に行った。

車で1時間ぐらいだったかな。

夜の海は静かだった。

聞こえるのは波の音だけ

誰も人はいない。私たちは2人浜辺に座っていた。

「目つぶって」

私の手を優しくにぎる彼

「手かして」

そう言い私の左手の薬指に指輪をはめた。彼からのプレゼント
一生大切にする

帰りは夜遅くなった。

私が夜の海がみたいなんて言っただから。

車に乗って帰っていた時 白い光が私たちを包んだ。

記憶がとんだ。

じじいはどこ？

病院？どうして？

私はどうしてここにいるの？

彼と車に乗ってたはず

彼は？彼はどこ？

「先生」

と看護婦さんがあわてて先生を呼びに行っていた。

「よかった」　なにが？

私はどうやら事故にあっただけ。彼は・・・19歳という若さで・

・

どうして彼なの？

私は泣き叫んだ。声が枯れるほど泣き叫んだ。

「やだよ、いけないでよ。私を1人にしないで」

現実を受け止められなかった。

受け止められなかった。

今みなさんが読んでいるこの小説です。

彼と過ごした1カ月はかけがえのない宝物。

一生忘れない。

そして彼を今でも愛してる。私の薬指は彼からもらった大切な指輪が今も光っている。これからもずっと・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2402b/>

o n e h e a r t ~ 片思いから ~

2010年12月13日21時35分発行